◪ 次の詩は、重度脳性小児麻痺のため、全身が不自由で口もきけなかった少年が、15 才という短い生涯の中でたった一篇、命を絞るようにして遺した詩です。

直接、交通安全とは関係はございませんが、例えば「あおり運転」の加害者に、このように相手を思う心が、少しでもあれば事故も減少するはずですが・・・。

ごめんなさいね　お母さん
ごめんなさいね　お母さん
僕が生まれて　ごめんなさい
僕を背負う　お母さんの
細いうなじに　僕は言う

僕さえ　生まれなかったら
母さんの　白髪もなかったろうね
大きくなった　この僕を
背負って歩く　悲しさも
「かたわな子だね」とふりかえる
つめたい視線に　泣くことも
僕さえ　生まれなかったら……。

ありがとう　お母さん
ありがとう　お母さん
お母さんが　いるかぎり
僕は生きていくのです

脳性マヒを　生きていく
やさしさこそが　大切で
悲しさこそが　美しい
そんな　人の生き方を
教えてくれた　お母さん
お母さん
あなたが　そこにいる限り

※「かたわ」障がい者に対する差別用語

◆ 症状が悪化し、少年の命がついに尽きようとする時、養護学校の先生が少年を抱きしめ少年の言葉を全身で聞き、先生の言う言葉が少年の言いたい言葉であれば、少年がウィンクでサイン、いいえであれば舌を出すという気の遠くなる作業を経てこの詩は生まれました。しかし、この２ヶ月後に少年は亡くなられたそうです。

娘が書いた神様への手紙

４歳になる娘が、字を教えて欲しいと言ってきたので、
どうせすぐ飽きるだろうと思いつつも、毎晩教えていました。
ある日、娘の通っている保育園の先生から電話がありました。
「○○ちゃんから、神様に手紙を届けて欲しいって言われたんです。」
こっそりと中を読んでみたら、
「いいこにするので　ぱぱをかえしてください　おねがいします」
と書いてあったそうです。　夫は去年、交通事故で他界しました。
「字を覚えたかったのは、神様に手紙を書くためだったんだ……。」
受話器を持ったまま、私も先生も泣いてしまいました。

◆この娘さんは、成長するにつれ交通遺児の寂しさ、辛さを強く抱く事になるかもしれません。それは、一家の大黒柱である父親が亡くなると、経済的な困窮に陥りやすく、交通遺児世帯の 40%は困窮、預貯金ゼロ世帯は 24%に及んでいるという現実があるからです。　この為、十分な救済措置が必要で、当協会も行っていますが、これだけでは少なく保険金・賠償金が思った以上に支払えていないのも現実です。

◆「交通安全協会」の活動に、是非ご理解とご協力をお願い致します。